

# 京都市動物園における飼育アカゲザル成体集団の社会関係

熊野 順一

[目的] 霊長類の社会関係はその種にとって普遍的なものではなく、集団の構成によって影響を受ける。京都市動物園のアカゲザル集団は、高齢個体の比率が高いことや、未成体個体がないこと、オスが1頭のみであることなどの通常のアカゲザル集団に見られない特徴を示す。本研究ではこのアカゲザル集団において、年齢と順位関係に着目しつつ集団内の社会関係を明らかにするとともに、高齢個体の加齢に伴う行動変容を確認することを目的とした。

[方法] 京都市動物園のアカゲザル集団の全個体13頭(オス1頭:22歳,メス12頭:11歳~22歳,2019年9月時点)を対象として、個体追跡サンプリング法を用いて観察を行った。1分ごとの瞬間サンプリング法では他個体との1m以内の近接状態と、活動性の指標として休息、移動、採食のうち対象個体がどの状態に当てはまるかを記録した。全生起法では社会的関わりとして、グルーミング、攻撃、サプラントを記録した。総観察時間は87.75時間であった。

[結果と考察] 本研究では3つの明瞭な傾向が得られた。1点目は、先行研究では高齢個体の行動的特徴として、活動性の低下が示唆されているが(Nakamichi, 1984; Hauser & Tyrrell, 1984)、本研究のアカゲザル集団では、高齢個体の活動性の低下が確認されなかったことである。成体個体と高齢個体の平均年齢の差は、Nakamichi (1984) では10.3歳、本集団では5.5歳と本集団の方が小さいため、活動性の変化が小さくなった可能性がある。Insel, Ruiz-Luna, Permenter, Vogt, Erickson & Barnes (2008) は、若齢個体の方が高齢個体に比べて新奇刺激への反応性が高いことを指摘している。しかし野生下に比べ、飼育下においては新奇の刺激が少なく、比較的若い個体でも探索行動が減少すると考えられる。そのため本集団では、比較的若い成体個体の新奇刺激への探索行動が減少し、高齢個体と同程度の活動性となった可能性がある。

2点目の傾向はNakamichi (1984) や Hauser & Tyrrell (1984) で示唆されている高齢個体の社会的孤立化が確認されなかったことである。近接とグルーミングの生起率は加齢にともなう変化はなかった。一般的に母ザルは未成体のコドモと関わる時間が一番長いといわれるが、本集団にコドモはいない。本集団の全てのメスはコドモがいる可能性のある年齢である。しかし、高齢個体は出産のピークを過ぎているため、成体個体と比べるとコドモがない影響は小さいと考えられる。よって成体個体は、高齢個体と比較してコドモがないことによる孤立化が進んでいるように見える可能性がある。

3点目の傾向は、本集団が一般的なアカゲザル集団と比較して寛容性が高いということである。本集団では敵対的交渉はあったが、咬むなどの激しい攻撃はほとんど観察されなかった。またほとんどの個体間でグルーミングが行われていることや高順位個体と低・中順位個体の間でグルーミングが行われた相手数に差がなかったことから、低・中順位個体がどの個体ともグルーミングできる寛容な社会が形成されていると考えられる。また低・中順位個体から高順位個体へのグルーミングに比べて、高順位個体から低・中順位個体へのグルーミングの回数の方が多かった。近接関係においても各個体の順位や年齢による影響が少なく、観察時には多くの個体が飼育スペースの中央の構造物の上部でかたまっていた。これらのデータから対象集団の寛容性の高さが明らかになった。(比較行動学)